優秀賞 一般部門

自分らしく

千葉県
武部 めぐみ

父が逝って三ヶ月後、今度は母に癌が見つかった。

一人で暮らす母、子供達は皆遠く離れていて、交代で週に一度様子を見に行くのがやっとだった。同居の申し出も、礼を言いながら固辞した。「子供達に迷惑かけるのは絶対に嫌なのよ」と笑った。

入退院を繰り返す日々となり、家族の付き添いが必要な事が増えると、母は何度も「申し訳ない、あなた達の生活の邪魔をして」と悔しそうに言った。

いよいよ長期入院の日程が決まると、母は辛い体をおしてミシンに向かった。お世話になる看護師さんへと、ポケットティッシュカバーを何個も作った。「レースを付けたら可愛いかしら」と痩せた背中が弾んでいた。病気で出来る事が少なくなる中、誰かの為に何か出来る事が、母は嬉しかったのだろう。

父と同じ病、同じ順序、同じスピードで母の体が弱っていく。父を看取ったばかりの母は、自分に残された時間がどれだけか、残酷なほどわかっていただろう。

病室に通う私に、何度も「ありがとう」と伝える母。「ありがとうの大安売りだねえ」と二人で笑った。

忙しい看護師さんに申し訳ないと、トイレには這ってでも一人で行く母。病人なのに何故そんなに気を遣うのかと問うと、「仕方ないのよ、性分だから」と笑った。

ある日、母にウナギの折詰を二つ頼まれた。母はそれを付き添いの家政婦さんに渡し、「もう大丈夫だから、冷めない内に」と早く帰した。そのしっかりした母の姿に安心し、帰り支度をする私に母は、「あなたにはたくさんありがとうを言ったから、もう言わないわ」と言い、また笑った。

その夜、母は「お父さん」と呼んだのを最後に意識を失い、三日後息を引き取った。

最期まで性分を貫き、母らしく、母のまま旅立っていった。